

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02947

研究課題名(和文) 学習者の英語熟達度と母語の事態把握の影響に関する研究：認知言語学の観点から

研究課題名(英文) Learner's English Proficiency and the Influence of Event Construals of their Native Language: From a Cognitive Linguistic Point of View

研究代表者

川瀬 義清 (Kawase, Yoshikiyo)

西南学院大学・文学部・教授

研究者番号：20108616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、川瀬科研(平成25年度～27年度)で明らかになった英語と日本語の事態把握の違いに基づき、それらの違いが学習者の英語にどのような影響を与えるかについて、英語熟達度と母語の事態把握の影響との関係について分析した。今回分析したグラウンディング要素については、母語である日本語の影響が習熟度の低いものから高いものまで幅広く見られるが、熟達度が上がるにつれ誤用が減っていることが分かった。また、他動性表現については、熟達度の低いものでもかなり習得しているが、熟達度が低いものの方が母語の影響が多く現れていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本の英語教育の中では文法教育はなされても事態把握という観点からの体系的な教育はあまり重視されてこなかった。このため教育現場では文法的ではあるが英語としては不自然な英語表現が見逃されてきた傾向にある。このような現状に対し、高等学校レベルから大学レベルの日本語を母語とする英語学習者のライティングについて調査・分析を行い、事態把握の違いの気づきをうながすような教授資料を作成するのは、日本人英語学習者の英語発信力を高めるのに有益なことであると考えます。

研究成果の概要(英文)：Based on the differences between English and Japanese construals revealed in our previous project, Grant-in-Aid for Scientific Research (FY2013-2015), this project analyzed how those differences affect English use by Japanese learners of English. We focused on the relationships between learners' proficiency and the influence of event construals in their native language, and analyzed grounding elements and transitive expressions. Regarding the grounding elements, although misuse decreased as the proficiency increased, the influence of event construals of Japanese language was widely observed from low to high proficiency learners. In addition, as for transitive expressions, although being quite well mastered, those with lower proficiency showed more of the influence of their native language.

研究分野：認知言語学

キーワード：事態把握 日英比較 日本人英語学習者 他動性 グラウンディング要素

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年の認知言語学研究の発展にともない、言語には人間の経験に基づく事態把握のあり方が反映されているという考え方が一般的になってきた (Langacker, 2008 他)。このことは、母語が異なれば、それぞれの言語による事態把握も異なってくることを示しているが、これまでの日本の英語教育の中では文法教育はなされても事態把握という観点からの教育はあまり重視されてこなかった。このため教育現場では文法的ではあるが英語としては不自然な英語表現が見逃されてきた傾向にある。これまで代表者である川瀬が行ってきた教員免許状更新講習において事態把握を中心とする言語の認知的なとらえ方について講習を行ってきたが、必ずしも現場の先生たちに日英語の事態把握の違いについて十分に認識されていない。

一方、最近では日本語、英語の特質を明らかにし、より自然な表現を教えようとする動きも見られる (池上, 2006, 池上・守屋, 2009 他) が、まだ教育現場において英語学習者がどの程度事態把握の違いを理解しているかという実質的な調査はほとんど行われていない。このような現状に対し、高等学校レベルから大学レベルの日本語を母語とする英語学習者の事態把握について調査・分析を行うのは有益なことであると考えられる。

[参考文献]

Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚—“ことばの意味”のしくみ』 日本放送出版協会, 東京.

池上嘉彦・守屋三千代 (2009) (編著) 『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』 ひつじ書房, 東京.

2. 研究の目的

本研究プロジェクトの目的は、言語の認知的研究を通して明らかになった日本語と英語の事態把握の違いについて、日本語を母語とする英語学習者の英作文にどのように現れているかを調査し、英語における事態把握の習得に向けて教授資料を開発することである。

代表者である川瀬が 2013 年度から 2015 年度に行った科研 (基盤研究(C)「事態把握の日英比較に基づく体系的な英語学習を目指して: 認知言語学からのアプローチ」課題番号 25370711) の研究成果に基づき、学習者の英作文データを用いてコーパスを構築し、日本語を母語とする学習者の英作文に見られる母語の影響を、母語である日本語と学習言語である英語の事態把握の違いという観点から分析する。さらに学習者データを元に習熟度と事態把握の理解度の関係という観点から分析し、得られた結果をもとに、日本語を母語とする英語学習者の英語による発信力を向上させるための効果的な教授資料の開発を目的とする。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、研究代表者の川瀬義清および研究分担者の長加奈子がデータ収集のための調査資料を作成し、研究分担者の大橋浩、川畠嘉美を含め全員でデータの収集を行った。続いて、全員でデータの分析を行い、川瀬、長、川畠が教授資料の開発を行った。全体の統括は研究代表者の川瀬義清が行い、以下の流れに沿って研究を進めた。

(1) 調査資料の作成およびパイロット調査

日本語を母語とする英語学習者のライティングデータを収集するための調査資料を作成した。動画と 4 コマ漫画を検討したが、パイロット調査の結果、被験者に提示しやすい 4 コマ漫画を用いてデータを収集することになった。

(2) データの収集

(1)により作成された調査資料を用いて、高校生レベルから大学上級者レベルまで幅広い被験者から英語ライティングデータを収集した。並行して、英語ネイティブスピーカーレベルの被験者からもライティングデータを収集し、日本語を母語とする英語学習者との比較のための基準データとして用いた。

(3) データの分析

収集したデータを、データベース化して、日本語を母語とする英語学習者のデータにおける他動性の現れとグラウンディング要素の表現について認知言語学の観点から分析を行った。続いて、英語母語話者のデータとの比較を行い、日本語を母語とする英語学習者のライティングの特徴を分析した。

(4) 教授資料の作成

(3)の結果に基づき、日本語を母語とする英語学習者のライティングに見られる母語(日本語)の影響を考慮した教授資料を作成し、平成28年度から平成30年度に実施された教員免許状更新講習等で提示した。

4. 研究成果

出来事を記述する場合、同じ出来事であってもその事態把握は話者によって異なり、その結果、異なる表現となって表れる。今回、日本語を母語とする英語学習者を対象に、同一の調査資料を用いて、高校生レベルから英語を専攻する大学生レベルまで幅広い学習者のライティングデータを収集し、母語の影響が熟達度の違いによりどのように表れているかについて、他動性の表現とグラウンディング要素の表現等に焦点を当て分析した。

他動性の表現について熟達度と他動詞文の使用について相関分析を行ったところ、熟達度による他動詞文の使用に大きな違いは見られなかった($n=81$, $r=.29$)。しかし、母語の影響による誤用例の頻度に注目すると、熟達度の低いものほど誤用例が多く、TOEIC換算の英語力で450点前後を境に誤用例が減ってくるのが分かった。

また、調査資料の4コマ漫画から特定の場面を取り出して、その場面における日本語を母語とする学習者の表現と英語ネイティブの表現と比較したところ、学習者のデータでは「人」を主語とする表現が大半を占めたのに対し、ネイティブのデータからは「もの」を主語とする表現もあり、多様性が見られた。

次にグラウンディング要素については、日本語を母語とする英語学習者のライティングデータには、名詞表現や時制におけるグラウンディング要素の欠落が幅広く見られた。これは、英語の事態把握が主客対峙型であるのに対し、日本語の場合は主客未分型であることによる母語の影響が表れているといえる。

このようなデータ分析に基づき、日本語と英語の事態把握の違いの気づきをうながすような教授資料を用い、教員免許状更新講習において現職の英語教員に対し講習を行った。参加者のほとんどは中学校または高等学校において日常的に英語科の教育を行っているものであったが、講習内容に対する評価は高く、十分現場で使うことのできる内容であるとの評価を受けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

①大橋 浩「Big Time 再考」(2019)大橋浩・川瀬義清他編著『認知言語学研究の広がり』開拓社、査読有、51-67.

②大橋 浩「同族目的語構文と副詞構文—コーパスに基づく分析—」(2018)西岡宣明・福田稔他編著『ことばを編む』開拓社、179-188.

③川島嘉美「英語学習者の事態把握に見る日本語の『無限定性』について」(2018)中村芳久教授退職記念論文集刊行会(編)『ことばのパースペクティヴ』開拓社、454-463.

〔学会発表〕(計8件)

川瀬義清「日本人英語学習者に見られるSVO構文の使用」(2019)第11回応用認知言語学研究会、西南学院大学.

大橋 浩「英語母語話者の事態把握」(2019)第11回応用認知言語学研究会、西南学院大学.

川島嘉美「英語学習者のアウトプットに見る事態把握」(2019)第11回応用認知言語学研究会、西南学院大学.

川島嘉美「英語初中級者のアウトプットに見る事態把握」(2018)第39回福岡認知言語学会、西南学院大学

川瀬義清「コーパスに見る日本語の助詞二格とヲ格の語順」(2018)言語研究と統計 2018、統計数理研究所.

川島嘉美「日本語の事態認知と他動詞文」(2018)第38回福岡認知言語学会、西南学院大学.

長加奈子「用法基盤モデルに基づく多読学習の分析」(2017)メソドロジー研究部会 2016年度第4回研究会、西南学院大学.

川島嘉美「英語学習者の事態把握とグラウンディング：英作文の認知言語学的分析」(2017)第36回福岡認知言語学会、西南学院大学.

〔図書〕(計1件)

大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編著(2019)『認知言語学研究の広がり』開拓社、312.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：長 加奈子

ローマ字氏名：CHO Kanako

所属研究機関名：福岡大学
部局名：人文学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：70369833

研究分担者氏名：大橋 浩
ローマ字氏名：OHASHI Hiroshi
所属研究機関名：九州大学
部局名：基幹教育院
職名：教授
研究者番号（8桁）：40169040

研究分担者氏名：川畠 嘉美
ローマ字氏名：KAWABATA Yoshimi
所属研究機関名：石川工業高等専門学校
部局名：一般教育科
職名：教授
研究者番号（8桁）：70581172

(2)研究協力者
無し

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。